



高僧遊女邂逅譚の系譜 : 西行の位置付け (二〇二五年度修士論文要旨)

方, 少雲

(Citation)

國文論叢別冊, 3:81-82

(Issue Date)

2026-08-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505570>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505570>



高僧遊女邂逅譚の系譜

——西行の位置付け——

方 少 雲

本論文は、西行と江口遊女の邂逅譚を、高僧遊女邂逅譚の系譜の中に置き直し、聖と遊女の上下関係がテキスト内部でいかに構築され、どの局面で揺らぐのかを、発話と視線、そして配列の働きから検討したものである。江口贈答歌（『山家集』雑部七五二・七五三番）は、解釈が「非難・軽蔑」から「機知・俳諧」まで分歧し、また主導権をめぐつても諸説が対立してきた。こうした分歧は、この贈答を「高僧が上・遊女が下」という前提だけで説明できないことを示す。さらに、江口贈答の初出は自撰家集『山家集』にあるにもかかわらず、議論の基盤が『新古今和歌集』本文へ傾き、家集内部での配置と文脈が十分に問われてこなかった点も問題となる。そこで本稿は、『山家集』の編集構造に立ち返り、応酬の中で誰が言葉の主導権を握り、相手の言葉がどう受け止められ、関係がどう変化するかに注目し、その視角を後代の物語化・図像化へ接続した。とりわけ「導く／導かれる」という配置が、出来事の意味を僧の言葉で確定するための骨格として働く点を押さえ、その骨格が江口で崩れる瞬間を追った。本稿の独自性は、（一）家集内部の配列を解釈の前景に据え、歌群の進行から西行像の生成過程を描いた点、（二）その揺れを受容史と系譜比較へ連続させ、江口を「特異な逸話」ではなく「関係が動く場」として位

置づけた点にある。

第一章では、『山家集』雑部七三六～七五五番の女性贈答歌群を、個別歌の精読ではなく、詞書と配列が形づくる連続した「物語」として読み直した。集全体を見ても、贈答歌群の途中にまよった二首（七四八・七四九番）の自作を挿し込む例は多くなく、しかも本歌群は規模の大きい連鎖として特異である。したがって配置そのものが解釈の核になる。七三六～七四三番では、出家と俗世の間で揺れる女性に寄り添いながらも、西行は導き手の位置に立つことを避け、七四四～七四七番でも精神的支えを求める声を意識的に退けて傍観者として振る舞う。ところが七四八・七四九番で、西行は言葉が共同体の信心を喚起するという意味での「力」を自覚し、七五〇・七五一番では女性を導こうとする態度へ傾く。だが直後の江口贈答で、その立場は遊女の返歌によって揺さぶられ、「導く者／導かれる者」という配列そのものが問い返される。さらに掉尾の七五四・七五五番は贈答の形式を超え、遁世した女性を見つめる沈黙と観照の位相へ帰帰する西行を描く。長い連鎖の末に「導く聖」像が仮構され、崩れ、語らずして見守る存在へ収束する過程を示すことで、本章は西行を完成された教化者ではなく、女性との対話のうちで揺れ動く未完の求道者として捉え、江口邂逅に感じられる違和感を、上下の反転ではなく関係の非固定性として論証した。

第二章では、この転換点としての江口贈答歌が、歌集・『西行物語』・『西行物語絵巻』・『撰集抄』へと媒介を変え、いかに再編成されるかを跡づけた。歌集では作者名や詞書の操作を通じて宿主が遊女として特定され、場合によっては宿を貸す結末によつ

て緊張が解消される。他方、『西行物語』諸本では叙述の付加によつて僧と遊女の距離や対立が調整され、相互理解、集団的返歌、嫌悪と聖俗逆転など、型の異なる揺らぎが生み出される。絵巻では空間構成と視線配置が関係を再組織し、『撰集抄』では遊女の発心が語られつつも、両者が相互に影響を及ぼし合う関係へと展開する。すなわち江口邂逅譚は、「導く聖／救われる遊女」へ一線に収束するのではなく、媒体ごとに焦点と主体が移動し続ける物語として受容されてきた。

第三章では、『今昔物語集』の墮落譚、性空普賢説話の遊女菩薩譚、『発心集』の結縁譚、『法然上人絵伝』の教化譚を並置し、救済の成否以上に、出来事の意味が誰の視線と発話によつて確定されるかが、高僧像の権威と上下関係を支えることを示した。多くの説話では、遊女は「墮落の証拠」「顕現の媒介」「救いを求める主体／対象」へ配役し直され、その発話は最終的に高僧像を補強する方向へ配置されることで、語りの主導権が僧側へ回収され、固定的な配列が成立する。これに対して江口では、遊女が墮落の存在にも、閉眼に応じて顕れる菩薩にも、罪を告白して教化を待つ対象にも回収されず、返歌の往復が西行の立ち位置そのものを動揺させる。したがって江口邂逅譚は、系譜から逸脱した例外ではなく、系譜内部で上下関係の作られ方を問い返す結節点として位置づく。ここに立ち上がる西行像は、遊女の発話に照らされて自らの位置を問い直される存在であり、この不安定さこそが西行像の成立と深化を支える核心だと結論づけた。加えて今後は、『西行物語』と『西行物語絵巻』の系統間対応や、中世後期以降の展開、とりわけ能（江口）に代表される舞台化の過程を接続し、同

じ主題が媒体の変化に応じて何を強調し何を消すのかを、より広い範囲で検証したい。

（ほう　しょううん）